

	一般社団法人名古屋大学農学部・生命農学研究科 同窓会報	発行所	一般社団法人名古屋大学農学部・生命農学研究科同窓会 名古屋市千種区不老町 http://www.agr.nagoya-u.ac.jp/~dosokai/
	セコイア通信	編集人	岩永青史・柴田秀樹
		発行人	小川雄二
		印刷所	株式会社 クイックス

農学部・大学院生命農学研究科の発展を目指した新たな試み

名古屋大学大学院生命農学研究科長・農学部長 中園 幹生



私は今年度(2023年度)から農学部・生命農学研究科同窓会名誉会長を仰せつかった中園幹生と申します。名古屋大学農学部・生命農学研究科同窓会会員の皆様におかれましては、日頃から農学部および大学院生命農学研究科の教育・研究活動にご理解とご支援を賜り、心より感謝申し上げます。また、この春に卒業・修了を迎えられた皆様に心よりお祝い申し上げます。今後のさらなるご活躍とご発展を祈念いたします。名古屋大学農学部(1951年創立)および大学院(1953年創立)では、70年以上の歴史の中で、これまでにおよそ10,000名の学士、5,900名の修士、1,900名の博士の学位取得者が社会に巣立ってまいりました。このように数多くの卒業生・修了生が、国内外の産業界、行政、アカデミアなどの多方面で活躍されていることを大変嬉しく存じます。

今年度は、新型コロナウイルス感染症が5類感染症へ移行したことに伴い、講義、実験実習、研究室での研究活動などが、ほぼコロナ禍以前の状態に戻りました。ただし、今後もオンラインによるリモートワークの良い点は活用すべきですので、柔軟かつ効率的な運用をしていく必要があると考えています。

現在、名古屋大学は世界と伍する研究大学を目指して、教育と研究力の強化を推し進めています。具体的には、学部から大学院での博士人材育成までを区切りなく繋いで、国際通用力の高い教育と人材育成をすることともに、世界トップクラスの知的成果の創出と価値化を進めています。また、2020年に名古屋大学と岐阜大学との国立大学法人統合により設立された国立大学法人東海国立大学機構においては、「知とイノベーションのコモンズとして、地域と人類の課題解決に貢献する新たな国立大学の確立」を掲げて、「東海国立大学機構ビジョン2.0」を策定しています。このビジョンの実現のために、活動の基本となる4つの事業(「教育・人材育成」、「研究・価値創造」、「社会連携・産学連携」、「国際展開」)と、持続的かつ着実にビジョンを達成するための4つのマネジメント基盤(「ガバナンス」、「財

務経営」、「人材の好循環とDEIB(Diversity, Equity, Inclusion & Belonging)」、

「デジタルユニバーシティ構想(キャンパスDX)と連携・共創・統合プラットフォーム」)を確立するための施策を「4×4戦略」と定義して推進しています。

農学部・大学院生命農学研究科としては、このような名古屋大学および東海国立大学機構のビジョンに沿って、国際性(グローバル)と地域性(ローカル)の両方の視点で、生命農学分野における課題解決を進める“グローバル”な人材育成と研究の発展を目指した様々な取り組みをしています。例えば、カセサート大学(タイ)および西オーストラリア大学(オーストラリア)と連携して、博士後期課程の学生を対象としたジョイントディグリープログラム(連携大学と共同で単一の学位を授与するプログラム制度)を実施しています。また、学部生・大学院生の海外短期派遣プログラム、海外大学の学部生・大学院生の名大への短期受入プログラム、アジアサテライトキャンパスにおける「アジア諸国の国家中枢人材養成プログラム」なども積極的に進めています。新たな試みとして、農学部・大学院生命農学研究科の国際研究ネットワークを拡大するために、「若手教員の海外派遣プログラム」や名古屋大学の戦略的パートナー大学であるノースカロライナ州立大学(米国)との「シードファンドプログラム」などの制度を独自に整備して、農学部・大学院生命農学研究科の将来を担う若手教員の国際共同研究の機会を増やす取り組みを始めました。さらに、生命農学分野の社会連携・産学官連携研究推進のための研究シーズ集作成やプラットフォーム構築なども新たに取組んでいます。

これらの教育・研究活動を継続的に推進するためには、部局の予算をもって賄うのが本来のあり方ですが、今般の電気代の高騰などによる予算逼迫のために、実際には部局予算だけでは不十分で、ご援助に頼らざるを得ないということが実情です。このような教育・研

究活動の趣旨にご賛同いただけるようでしたら、是非ともご寄附をご検討いただき、ご支援を賜れば幸甚です。ご寄附の情報につきましては、名古屋大学農学部・大学院生命農学研究科のホームページ（<https://www.agr.nagoya-u.ac.jp/>）のトップページに、「ご支援（寄附）のお願い」というバナーがございますので、そこをクリックしていただくとご寄附の手順が掲載されています。このような依頼をいたしまして大変

恐縮ですが、農学部・大学院生命農学研究科の発展ならびに次世代の育成に向けてのご理解とご支援を何卒よろしくお願い申し上げます。

このように農学部・大学院生命農学研究科は、同窓生の皆様に築いていただいた70年の伝統を次世代に継承し、さらに新たな教育・研究活動を推進することによって、今後一層の発展を目指す所存です。引き続きご支援賜りますようお願い申し上げます。

同窓会の活性化をすすめています

名古屋大学農学部・生命農学研究科同窓会 会長 小川 雄二

同窓生の皆様におかれましてはますますご健勝のこととお喜び申し上げます。また、今年度、農学部・生命農学研究科をご卒業、ご修了された皆様方には、心よりお祝い申し上げますとともに、晴れて同窓会員になられた皆様を、同窓生1万人を代表して熱烈に歓迎いたします。

2023年10月21日に開催されました同窓会総会において、同窓会長に再任されました小川雄二でございます。1978年に農芸化学科を卒業、1983年に食品工業化学専攻博士課程を満了し、現在は愛知県内の私立大学とその附属幼稚園に勤務しております。

長年、任意団体として運営してきた同窓会は、2021年10月16日の総会で一般社団法人化することを議決し、2022年10月15日（土）には一般社団法人名古屋大学農学部・生命農学研究科同窓会への移行が完了いたしました。一般社団法人化にあたって、同窓会の活性化を目的に、意思決定を行う「理事会」と業務執行を行う「幹事会」に分ける組織改革を行いました。同窓会業務の多くを担っていただく幹事については農学部・生命農学研究科の「卒業生との連携委員会」の先生方に務めていただいております。

また、「名古屋大学農学部・生命農学研究科と一般社団法人名古屋大学農学部・生命農学研究科同窓会との連携協力に関する覚書」も締結することで、農学部・研究科との関係をより深めてるとともに、強力にバックアップして下さっています。さらに、農学部執行部の先生方とは定期的に懇談の機会をもち共同の取組

も進めております。加えて、学部内に場所をお借りして同窓会事務局員も配置しておりますので、会費の納入やご寄付についてのご相談や情報提供にお応えできる体制を整えております。同窓会のこと、農学部のことなど何なりとお問い合わせください。

同窓会は、年1回のセコイア通信の発行、卒業関連諸行事、入学関連諸行事、名古屋大学ホームカミングデーに合わせた「卒業・修了50周年記念祝賀会」、同窓会総会、講演会を行うほか、関東支部、関西支部も積極的に活動しております。コロナ禍の時期には休止しておりました対面のイベントも、今後は全面的に開催してまいります。イベントの詳細については、本セコイア通信の別頁をご覧くださいとともに、同窓会ホームページでも随時ご案内しておりますのでご確認ください。同窓生の皆様の諸行事へのご参加を心よりお待ちしております。

なお、2024年3月には同窓会名簿を発行することにしております。名簿作成を委託しております（株）サラトより、別途ご案内が届いているかと存じます。多くの同窓生の皆様にご購入いただきます様お願い申し上げます。

同窓生の皆様におかれましては、これまで以上に同窓会活動に関心を寄せていただきますとともに、同窓会諸行事、支部行事へのご参加を心よりお待ちしております。



信頼と繋がり、「今を良く生きる」ということ

動物科学専攻(動物生殖科学)・名古屋大学副総長 東村博子



生命農学研究科を定年退職するに当たって、まず同僚や後輩の皆さんに伝えたいことは、これまで支えて下さったことへの「感謝」である。そして、「平和の学問」である農学を選んだことへの誇りと自信をもって、教育と研究に邁進して頂きたいということである。

本学部・研究科には、1982年に名古屋大学農学部畜産学科に入学してから、途中一年間の米国での留学・ポスドク期間をはさんで、40年以上在籍したことになる。もともと、女子大を卒業した後での入学だったので、大学院に進学する予定も気持ちも全く無かった。しかし、研究室(旧家畜繁殖学)配属で故横山昭先生と、故前多敬一郎先生との出会いがあり、卒論テーマ「泌乳期の性腺機能抑制に関する研究」を通じて、学問の楽しさに目覚め、定年まで教員として勤め上げることとなった。

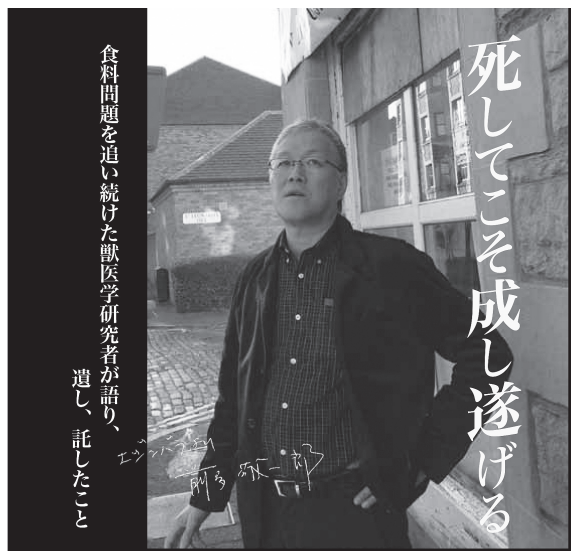
研究者として最も大切なことは、信頼し合える仲間との繋がりだ。2000年代初頭に、共同研究を契機として、キस्पペプチン研究との出会いがあった。キस्पペプチンニューロンは、哺乳類の種を超えて、生殖機能を最上位から制御するマスターレギュレータである。信頼できる仲間と共に、私自身がリアルタイムで生殖科学にパラダイムシフトを起こした研究に携われたことは、研究者としての大きな喜びであった。この間、多くの学生・院生を指導し、若手や学生達とともに少なからずの研究成果(論文)をだしてきた。それらは研究に関わった学生や同僚などとの記憶であり、記録である。

これらの成果が、近い将来、家畜の繁殖能力の向上のための応用研究に役立つことを、心から願っている。

定年まで勤め上げられることは、実は当たり前のことではない。後に夫となった前多が定年を待たず、2018年に現役東大教授のまま62歳で急逝したことは、私の人生に大きな悲しみと衝撃をもたらし、現在もその喪失感は続いている。前多は、本学農学部における海外実地研修や海外受け入れ研修の礎を作った人である。前多には、若者がアジアの農業事情を現場で学ぶことが、彼らの使命感を刺激し、農学の意義を知る機会になるとの強い信念があった。そして、カンボジアやタイの元指導生や本研究科の教員の協力を得て、これらの実地研修を立ち上げた。その後、海外実地研修は前多の遺志を継いだ若手教員達に引き継がれ、規模を大きくしながら数多くの若者達にインパクトを与え続けている。さらに、カンボジア王立農業大学が名大サテライトキャンパスのひとつとなり、連携が強化されていることは、大いなる喜びである。これも、人と人との信頼と繋がり成し遂げたものだと思う。

私自身は、大学教員としてのお大半を「二足のわらじ」で過ごした。ひとつは教育・研究、もう一つは男女共同参画である。2002年度に本学男女共同参画室員に、その3年後に同室長になって以来、現在の副総長(多様性・男女共同参画担当)に至るまで、名古屋大学の男女共同参画を担ってきた。この活動を通じて、異分野の方々との大切な出会いや繋がりが数え切れないほどあった。心残りは、生命農学研究科での女性教員の活躍が極めて限定的だったことだ。日本のジェンダー平等は、まだまだ道半ばである。性別によらず多様な全ての人材が適材適所で活躍することが日本の「伸びしろ」である。ジェンダー平等が名実ともに実現すれば、日本の失われた30年を取り戻すことができると確信している。

私の座右の銘は「悲観主義は気分だが、楽観主義は意志である」というフランスの哲学者アランの言葉だ。逆境に陥ったときには、これを機に学び成長できるし、本当に信頼できる人が誰なのか分かるとポジティブに考えるように、意志を持って努力してきた。そんな私が最もポジティブシンキングを発揮したのは、最愛の夫前多敬一郎が急逝した直後に、彼の生前の言葉を同僚や友人、教え子から掘り起こし、彼が生きた証として後世に残すために追悼本「死してこそ成し遂げる」(左写真)(<https://www.heibonsha.co.jp/book/b497222.html>)を作ろうと決意し、これを成し遂げたことだったと思う。人は、突然この世にいらなくなることがある。「今を良く生きよう」と改めて思う。



前多敬一郎
東村博子編
ほか

「農学は平和の学問、
その信念と使命感は受け継がれる」

推薦——元村有希子(毎日新聞論説委員)

遺稿と関係者の寄稿で振り返る獣医学者、前多敬一郎の軌跡

平凡社

定価：本体3,500円(税別) 奥表二重黒影

「糖鎖時代の到来」は実現するか？

生物機能開発利用研究センター（糖鎖生命コア研究所） 北島 健



私の研究はひと言でいいますと「糖鎖」の研究です。糖鎖構造の複雑さを探究しつつ、動物の受精、発生、分化、神経系、免疫系における糖鎖の機能およびその破綻による病態の理解を目標として取り組んで参りました。糖鎖と言うと、40年前は「それ何ですか？」という反応が殆どでした。最近では、「糖鎖が重要なのはわかる。でも難しそうだ」という反応に変化しましたが、相変わらず手が出せない手強さは消えません。全ての生物の細胞表面は分厚い糖鎖に覆われており、その機能への興味は尽きません。しかし、研究そのものは核酸（遺伝子）やタンパク質に比べて著しく遅れているのが現状です。研究の立ち遅れは構造の複雑さにあり、実際、構造決定も機能解明も容易ではありません。このような糖鎖研究の現状を打開するために、2020年、東海国立大学機構の下、名古屋大学と岐阜大学に糖鎖生命コア研究所（iGCORE）が共同設置され（<https://igcore.thers.ac.jp>）、「ヒューマングライコムプロジェクト（HGA）」構想が立案されました。さらにHGAは10年計画で生命科学領域への支援としては桁外れとなる文部科学省大規模学術フロンティア促進事業に採択されて、まさに私の定年の2023年度から始動しました（<https://human-glycome-atlas.org>）。それまでも何度か糖鎖研究領域に研究費が注がれて、そのたびに「糖鎖の時代が到来した」と言われましたが、個別研究の延長に留まり生命科学全体への広がりはありませんでした。HGAは糖鎖研究のインフラ整備とヒトの全糖鎖構造のデータベース化を使命としており、ゲノムやタンパク質と同じように全ての研究者が自在に扱うことができる巨大データの集積とその利用整備を目標としており、生命科学全体への波及効果が期待されます。今度こそ本当に「糖鎖時代の到来」を告げることができれば素晴らしいと期待しています。しかも、名大がそのビッグプロジェクトの中心に居ます。とくに、指導的立場の先生も含めて生命農学の教員数名がその中心部でHGAを牽引しています。同窓会の皆様には、どうか「糖鎖」の行く末に関心をもって見守っていただきますようお願いする次第です。

私は1996年6月に農学部の助教授として名古屋の地

に参りました。その後、生物分子応答センター、長年過ごした生物機能開発利用研究センター、さらには最近開所した糖鎖生命コア研究所へと所属を変えたものの、2024年3月定年までの27年余の期間において、生命農学研究科・農学部の教育、運営に携わって参りました。私は学生さんの身近にいる環境が好きで、研究者人生で訪れた転機においても、大学からは離れないようにしてきました。学生さんの発想の斬新さやバイタリティーには、実現不可能そうなことも可能にしてしまう力があります。実際、彼らの手助けのおかげで成し遂げられた論文がいくつもあります。学部3年生へのガイダンス時には、必ず「人と同じことはしない」独創の精神をもって研究に取り組むことが重要であると呼びかけてきました。また、私の恩師が「重要な研究なんていうものは最初からあるものではない。誰かが重要にしたから重要な研究になったのだ」という話しをして下さったことがあり、独創の精神こそ重要な研究の確立に必須であると思って参りました。人と同じことをしないのは、言うほど簡単では無く、孤高を貫くために精神的にもきついです。でも、矛盾するようですが、友人とのたわいない会話や議論が、その困難さの障壁を下げてくれるのも事実です。そのため、我々はラボ内の親睦会を大切にしてきました。とくに、COVID-19パンデミック下の4年間は「なべ会」と称して、その状況に応じてやり方を工夫しつつ、学生さんたちが集まる機会を絶やしませんでした。新型コロナ禍は人類が遭遇した辛い出来事のひとつでしたが、我々にとっては、仲間の大切さを認識する良い機会になったと思っています。長年、研究室を一緒に切り盛りして下さった現生命農学研究科教授の佐藤ちひろ先生によると、私の直接指導した学生は、博士が22名（女7；男15）、修士が54名（女24；男30）、学士が53名（女22；男31）になります。学生の皆さんには「一生のお付き合いをしましょう」と言って送り出して来ましたが、気がつけば、随分と大勢の頼もしい友人、仲間ができたとしみじみ思います。

“すべてを背負う泥くさい科学”

森林・環境資源科学専攻（森林水文・砂防） 田中隆文

私が名古屋大学農学部治山工学研究室（現 森林水文・砂防学研究室）を卒業した1981年3月に自然災害科学会が創立されその事務局が同研究室に設置された。研究室の片岡順先生の魅力に惹かれそのまま大学院に進学した私は、当然のごとく自然災害科学会の最初のそして、しばらくは唯一の学生会員であった。インクで手書きされた原図や万年筆で執筆された投稿原稿の整理のバイトも私の担当となった。自然災害科学会は文理の様々な学部や研究機関の研究者から構成され、理事会や編集委員会や様々な非公式の打合せも名古屋大学農学部で開催されたため、日ごろから研究室には来客が絶えず、事務局手伝いの私もよく会話の輪に入れて頂いた。初代会長の松澤勲先生は、日本でプレートテクトニクス理論がなぜ定着しないのかという話をたびたび説明して下さいました。片岡順先生が何度も話して下さいしたのは1972年に愛知県の西三河、岐阜県の恵南を襲った土砂災害についてであった。3000ヶ所を超える土砂災害の一つ一つを空中写真で実体視して源頭部の表層崩壊とその崩土の流下部分とに分けて計測するという膨大で地道な研究が片岡順先生と竹田泰雄先生を中心に実施され、「平方キロあたり200個前後の崩壊が発生している地区」と「100個前後の地区」を地図上に図示して報告された。しかし引用した他機関の研究者が勝手に150個を閾値とした凡例につかえて崩壊密度の図にしてしまい孫引きで広がるに至って、片岡先生は「単一の数値指標だけの図にしてしまうと、多くの特徴が消えてしまう。」と嘆かれ、「様々な特徴をもつ自然に謙虚であれ。」と何度も諭された。

当時は従来の水文学のイメージを覆す契機となった名著「新しい水文学」が刊行されたばかりで（原著のHillslope hydrologyは1978年刊）、まさに斜面水文学の全盛期であった。山腹に多数のセンサーを配して自記記録させ（“磁気記録”は高価で手が届かなかったが）、物理的な基礎式をたて数値解法で山腹斜面土層中の水の動態をシミュレーションできることを謳う斜面水文学は、まだ20代の若者であった私には眩しく、櫓を組み飛行船や高所作業車を駆使する共同水文観測に惹かれ没頭し、いつしか自然災害科学会も退会してしまった。しかし不惑の年を過ぎた頃、熱帯雨林を見下ろすクレーンから林冠を何ヶ月も眺めていて感じたのは、眼前に広がる光景を鉛直一次元の水文気象のプロファイルにモデル化することの虚しさであった。「様々な特徴をもつ自然に謙虚であれ。」に背いていたのだろうか。その疑問は、学際的な分野で、当時、持て囃されていた「知の構造化」論では多くの要因がこ



ぼれ落ちてしまうという危惧となった。そこで洗練化された「構造化」とは真逆の泥くさい「知の野生化」を冠した研究会を立ち上げた。「注目する要因だけに絞らない科学」のあり方を探るため、科学論の本丸の科学技術社会論学会および、「知的生産の技術」の梅棹忠夫先生創立の日本展示学会の門を叩いた。その直後に東日本大震災が発生し、「想定外」という語が無責任な釈明に使われるのを私は座視できず再び防災科学の研究に関わることとなった。

様々な分野・世代の方々に参画して頂いた「知の野生化研究会」の報告書「想定外を生まない防災科学」が書店に平積みされ、“飼い馴らされた洗練された科学知”ではなく“すべてを背負う泥くさい防災科学”が必要だという主張は、大きな反響を頂き、その後、防災展示論や防災計画論に発展した。後年、科学技術社会論学会・柿内賢信記念賞（実践賞）や日本展示学会論文賞を受賞した際に、「“すべてを背負う泥くさい科学”は、農学分野で培われたものなのか？」という質問を他分野の方からよく頂いた。お天道様次第を想定外とはせず遅く磨かれてきた知の結晶が、農学であることに気づかされた。

土曜日に授業も仕事もあった週休一日制の昭和の時代から平成、令和と45年間、名古屋大学農学部にお世話になった。激動の時代であったが、おそらく今後の時代のほうが激動であることは間違いないであろう。“注目した要因だけに絞らない科学”は、農学のもつ多くの強みのなかのひとつであるが、お天道様次第だがそれに翻弄されないという先人たちが培ってきた知恵であり、今後ますます重要になると思われる。恩師、先輩、後輩、農学部の同窓の皆様には厚く感謝を申し上げます。

樹に寄り添って47年

森林・環境資源科学専攻（森林生態学） 小川一治



私は学部も大学院もここ名古屋大学で過ごし、途中1年間海外の大学に籍を置いた以外は、教員としても農学部でお世話になりました。学科は林学科でしたので、教養部の2年間をも含めると、樹に寄り添いながら47年が過ぎていった感じがします。

そしてこの47年の中で、私の研究は日本での温帯林の研究からはじまり、スウェーデンでの北方林の研究、その後、マレーシアでの熱帯林の研究、また、亜熱帯沖縄本島でのマングローブ林調査へと続き、主な森林帯での研究を遂行する機会に恵まれました。

学部4年の時に今の森林生態学研究室の前身である造林学講座に配属され、穂積和夫先生の指導のもと名古屋市内の田んぼに植栽したヒノキ苗の成長や呼吸をテーマにした卒論研究が私の研究の出発点となりました。ただ、慣れないせいか、いろいろな測定には時間がかかり、あまり正確に上手く測れなかったように思え、測定結果には自信が持てませんでした。

それで大学院では実験地を美濃加茂市にあった岐阜営林署の苗畑に変更しました。その苗畑は広大で、播種後3年までのヒノキ苗が多数育成されており、実験材料には十分でした。実験内容も、光合成測定を追加し、ヒノキ苗の成長や物質生産についてより詳しく調べることができたように思えます。同時に、研究室を挙げて人工林の伐倒調査が毎年行われましたが、中でも、段戸国有林の巨大なヒノキの成熟林の伐倒調査は印象に残っています。

また、この当時、スウェーデンのスネ・リンダー教授のグループが発表したヨーロッパアカマツの球果の呼吸と光合成についての論文に興味深く読んでいたことが今でも思い出されます。私は球果の光合成による

CO₂再固定が不思議な現象に思え、1981年に京都で開催されたユフロの国際学会でリンダー教授と会い、その光合成の現象について親切にも説明してもらい感激した次第です。

これが縁で学位取得後、スウェーデン農科大学では客員研究員として、リンダー先生をはじめとする海外の研究者と初めての共同研究を経験しました。そこではヨーロッパアカマツの幹の呼吸測定をとおして、最先端の測定装置に触れることができ、その方面の知識も深まりました。

帰国後、本学部の助手に採用され、マレーシア・日本共同プロジェクトにおいて、マレーシア農科大学でドリアン繁殖器官の光合成や呼吸の実験を行う機会に恵まれました。測定装置は国立環境研究所の古川昭雄さん（当研究室の先輩）の尽力により、インタクト法による昼夜連続測定を実施することが可能となりました。

また、日本でも、指導生と共に、クスノキを材料とし、繁殖器官と葉の光合成・呼吸を測ることにより、繁殖器官と葉の転流による光合成産物の量的バランスを明らかにしました。その研究は、大学院で学内の二次林の林床に生育するアオキを材料とした繁殖器官の物質収支の解明へと発展していきました。

このように私の研究は多くの方々の恩恵に与りました。特に、長年に渡りお世話になった本研究科の皆様には御礼申し上げます。また、大学を取り巻く環境は厳しくなっておりますが、生命農学研究科が益々発展することを願っております。

令和6年度名古屋大学農学部・生命農学研究科同窓会 代議員会、総会、講演会、懇親会のご案内

名古屋大学農学部・生命農学研究科同窓会では、名古屋大学ホームカミングデーに合わせて代議員会、総会、講演会、懇親会を開催いたします。詳細は、同窓会ホームページ (<https://www.agr.nagoya-u.ac.jp/~dosokai/>)にてご案内いたしますので、後日ご確認ください。

○代議員会

日時：2024年10月19日(土) 昼頃
場所：名古屋大学農学部

○総会、講演会

日時：2024年10月19日(土) 午後
場所：名古屋大学農学部
会費：無料(講演会は一般に公開いたしません)
講師：榊原 均(さかきばら ひとし)氏
昭和63年3月 農学部農芸化学科 卒業
名古屋大学大学院生命農学研究科 教授
令和5年11月 紫綬褒章 受賞
演題：『栄養環境に応答した植物成長調節の分子機構』

○同窓生在籍企業紹介

日時：2024年10月19日(土) 午後
場所：名古屋大学農学部

○懇親会

日時：2024年10月19日(土) 夕刻
場所：名古屋大学農学部(予定)

連絡先：農学部・生命農学研究科同窓会 幹事会 総務 柴田秀樹
メールアドレス：shibabou@agr.nagoya-u.ac.jp

同窓会の開催について

同日に個人的に同窓会を企画される場合、農学部・生命農学研究科同窓会の懇親会を1次会としてご利用いただくことができます。同窓会事務局(dosokai@agr.nagoya-u.ac.jp)まで事前にご連絡下さい。必要に応じて、同窓会ホームページを掲示板としてご利用いただくこともできます。

昭和49年卒業生および修了生(満期退学)の卒業50周年記念祝賀会の案内

昭和49年卒業生および修了生(満期退学)の50周年記念祝賀会は、名古屋大学ホームカミングデーに合わせて2024年10月19日(土)に開催する予定です。後日、祝賀会へのご招待状を送付させていただきます。万障お繰り合わせの上ご出席ください。祝賀会に関する情報は8月以降に同窓会ホームページ(<https://www.agr.nagoya-u.ac.jp/~dosokai/>)に掲載いたしますので、ご確認ください。

《代議員選挙の公示》

本会定款第12条ならびに代議員選出規則に基づき、
2024・2025年度代議員選挙を下記のとおり行います。

1日現在の本会の正会員が有する。

記

- 1. 代議員の候補人数と任期
 - ・101名（詳しくは代議員選出規則をご参照ください）
 - ・任期：2024年定時総会から2025年定時総会直前までの2年間

4. 投票方法

所定の形式に基づいたWEB入力での不信投票を行う。

投票を行う際には選挙管理委員会まで投票を行う旨を連絡し、返送されるwebアドレスから投票を行う。
(inatetsu@agr.nagoya-u.ac.jp)

- 2. 選挙日程
 - ・投票期間2024年4月1日（月）から7月31日（水）まで
 - ・開票2024年8月1日（木）（予定）

以上

- 3. 選挙権
 - 選挙の行われる年（以下、「選挙年」という）4月

2024年3月29日

一般社団法人名古屋大学農学部・生命農学研究科同窓会
選挙管理委員会委員長 稲垣哲也

2024・2025年度代議員候補者

1	小木曾正敏 (1968)	16	藤井 潔 (1979)	31	児玉 秀典 (1987)	46	山田 邦夫 (1994)	61	Mohamed ubihi (2000)	76	高木 直人 (2010)	91	岡 大椰 (2019)
2	並河 鷹夫 (1968)	17	安川 拓次 (1979)	32	平野 淳一 (1988)	47	福田 秀志 (1994)	62	川合 康洋 (2000)	77	橋村 侑磨 (2011)	92	宮田 苑加 (2019)
3	阿部 芳男 (1968)	18	間瀬 英男 (1979)	33	熊澤 茂則 (1988)	48	高須 昭則 (1995)	63	篁 明洋 (2001)	78	尾頭 信昌 (2011)	93	中川 貴雄 (2020)
4	山木 昭平 (1970)	19	岩崎 行玄 (1980)	34	伊神 裕司 (1989)	49	平野 恭弘 (1995)	64	浅井 俊雅 (2002)	79	山川 陽平 (2011)	94	市野真裕美 (2021)
5	加藤 壽郎 (1970)	20	菅沼 教生 (1980)	35	大久保 武 (1989)	50	佐光 佳弘 (1995)	65	吉田 宗平 (2003)	80	稲垣 哲也 (2011)	95	勝田 哲史 (2021)
6	宗宮 弘明 (1971)	21	石川 靖文 (1981)	36	落合 公也 (1989)	51	氏田 稔 (1995)	66	山田 貴亮 (2004)	81	佐野 健志 (2011)	96	水谷 友香 (2021)
7	深谷 雅博 (1972)	22	福與 修 (1982)	37	和泉 秀彦 (1989)	52	平泉 智子 (1996)	67	柴田友美子 (2004)	82	小川 拓哉 (2012)	97	原屋 正龍 (2022)
8	野間 順一 (1972)	23	木野 勝敏 (1982)	38	長谷川 稔 (1990)	53	間崎 剛 (1997)	68	服部 洋子 (2005)	83	大井 崇生 (2012)	98	柵木香奈穂 (2022)
9	横越 英彦 (1972)	24	荒川みはる (1984)	39	井野 右文 (1990)	54	河原崎泰昌 (1997)	69	鈴木 孝征 (2005)	84	都築 知佳 (2013)	99	柏田 星南 (2022)
10	西村 幹夫 (1973)	25	小川 一治 (1984)	40	福島 和彦 (1990)	55	入山 朋之 (1998)	70	新城 明久 (2006)	85	柴田 晃秀 (2016)	100	村上 光 (2023)
11	片山 正人 (1975)	26	森上 敦 (1984)	41	竹島 喜芳 (1991)	56	榊原 岳史 (1998)	71	玉木 一郎 (2006)	86	澤田 光希 (2017)	101	浅原 南 (2023)
12	駒田 肇 (1975)	27	吉木 淳 (1985)	42	岩崎 雄吾 (1991)	57	近松 豪 (1998)	72	野口 祐司 (2007)	87	岸 健太 (2018)		
13	裏地 達哉 (1977)	28	二村 幹雄 (1985)	43	保坂 正春 (1991)	58	犬飼 義明 (1998)	73	伴 佳典 (2007)	88	小島瑛里奈 (2018)		
14	小野 珠乙 (1977)	29	水上 優子 (1987)	44	武田 信一 (1993)	59	中西 洋一 (1999)	74	横井 翔 (2009)	89	原田美弥子 (2018)		
15	小川 雄二 (1978)	30	中園 竜一 (1987)	45	朴 熙万 (1993)	60	中川 由生 (1999)	75	落合 正樹 (2010)	90	藍場 将司 (2018)		

(カッコ内は最終卒業年（予定も含む）)

卒業年は名簿をもとに記載しております。卒業年等が誤っている場合は大変申し訳ありませんが、inatetsu@agr.nagoya-u.ac.jp までご連絡くださいますようお願い申し上げます。

一般社団法人名古屋大学農学部・生命農学研究科同窓会代議員選出規則

第1条（目的）

この規則は、この法人の定款第12条の規定に基づき、代議員の選出・代議員選挙に関し必要な事項を定めることを目的とする。

第2条（選出方法）

代議員は、正会員の中からおおむね各卒業年度の各学科又は各専攻につき1名の割合で会員の代議員選挙により選出する。

第3条（選挙権及び候補人）

- 1 代議員選挙の選挙権は、選挙の行われる年（以下、「選挙年」という）4月1日現在の本会の正会員が有する。
- 2 前期までの代議員を代議員選挙の候補人とする。ただし第11条・第12条に示す通り、代議員の辞任・欠員が生じた場合は推薦後任者を代替りの候補人とする。
- 3 前期までの代議員に加え、前回の選挙から新たに正会員になった会員の中からおおむね各卒業年度の各学科又は各専攻につき1名の割合で候補人を選出する。この候補人は新規に正会員となった会員の互選によって選出する。

第4条（選挙管理委員会）

この規則による選挙の管理執行に関する事務は、本会選挙管理委員会（以下、「委員会」という）委員及び本会事務局職員が行う。

第5条（選挙の公示）

選挙の公示は、選挙人、投票日または投票期間、投票場所または投票方法、投票に関する注意事項等を内容とし、選挙年3月にこの法人の機関誌（以下「セコイア通信」という）及びホームページにて行うものとする。

第6条（選挙期日）

選挙期日は、前任者の任期満了年の7月末日までとする。

第7条（投票）

- 1 選挙方式は不信任投票とする。
- 2 投票はあらかじめ委員会が定めた所定の形式に基づいたweb入力、または所定の形式の投票用紙を用いた郵送で行う。
- 3 投票は、無記名投票とする。

第8条（開票）

- 1 委員会は、選挙の公正性を確保するため、選挙期日までに、正会員の中から2名以上の開票立会人を指名する。
- 2 開票は、開票立会人の立会いの下に、選挙終了後直ちに行わなければならない。

第9条（代議員の当選人の決定）

- 1 代議員の当選の決定に当たっては、不信任数が選挙権を有する会員の総数の半数未満であったものを当選人とする。
- 2 当選人が決定したときには、委員会は当選人に当選の旨を通知し、ホームページで公表しなければならない。

第10条（異議の申立て）

選挙の効力に関して異議のある選挙人及び候補人は、選挙結果発表日から14日以内に、文書で選挙管理委員会に対して異議を申し立てることができる。

第11条（代議員の辞任）

- 1 代議員が辞任する場合は、同窓会ホームページ掲載の代議員辞任願に必要事項を記入の上理事会に提出し、理事会の審議によってこれを認める。
- 2 代議員辞任願には、原則として代議員の同年・同学科（もしくは同専攻）卒業の推薦後任者を記入することとする。
- 3 代議員本人によって推薦後任者を選定できない場合、この選定は理事会が行う。推薦後任者は原則として辞任する代議員と同年・同学科（もしくは同専攻）卒業の正会員から選出する。
- 4 （諸般の理由により）理事会による推薦後任者の選定が難しい場合は、当該代議員を欠員のままとする。
- 5 代議員は辞任後においても後任者が選出されるまではその職務を行わなければならない。
- 6 推薦後任者は推薦後最初に行われる代議員選挙の代議員候補者となる。

第12条（代議員の欠員）

- 1 （諸般の理由により）代議員に欠員が生じた場合には、理事会が推薦後任者を選定する。
- 2 （諸般の理由により）理事会による推薦後任者の選定が難しい場合は、当該代議員を欠員のままとする。

第13条（選挙事務）

選挙に関する事務は、本会の事務局において行う。

第14条（規則の変更）

この規則は、社員総会の議決によって変更することができる。

附則

- 1 2022年9月1日から2024年10月の総会終了時までの代議員には、旧同窓会の2022年8月31日現在の評議員のうち代議員就任の承諾を得たものが就任する。
- 2 この規則は、2022年8月29日より実施する。
- 2 この規則は、2024年1月30日より実施する。

卒業生の言葉

学生生活を振り返って

生物環境科学科 森林化学研究室 加藤 琴美

私たちの学年は、世界中でコロナウイルスが急速に拡大し、感染症への警戒が非常に強かった時期の入学でした。そのような状況下で始まった大学生活も終わりが近づき、年月が過ぎ去る早さに驚いています。

様々な活動のなかでも一番力をいれたのは、漕艇部での活動です。特に1年生のときは、大学でも対面の授業がかなり制限されており、周囲に知り合いが1人もいなかった私は、友達ができず寂しい日々が続いていました。そんな中、課外活動系の皆様、先輩方などたくさんの方のご尽力の甲斐あって、部活動は少しずつ再開していきました。活動を通して、一生忘れられないような思い出を共有するかけがえのない仲間ができました。自分が上級生になってからは、先輩方からいただいた御恩を後輩に返せるよう、全力で活動しました。楽しいことばかりではなく、自分の未熟さを自覚する機会も数多くありましたが、その分成長できたと信じています。部長先生や同期の部員に助けられながら、後輩の世代へバトンを繋ぐことができました。部活動は大学生活へ彩りと充実感を与えてくれました。

研究室へ配属になってからは、今までずっと椅子に座って取り組んできた勉強とはまた違う形で、自分の生活の中に研究活動というものが染みこんできたような感覚がします。長時間実験に勤しんだのは初めてで、心が折れそうになる瞬間もありました。しかし、先生方や先輩たちが淡々と努力し続ける姿に励まされていました。自分なりにゆっくりではありますが、研究室生活に慣れ、知識や技術を身に着けることができました。大学院でも、これらにさらに磨きをかけ、研究に精進してまいります。

親身にご指導くださった農学部先生方、研究室の先輩方、遠くから支えてくれた家族、苦楽を共にした友人たちに心から感謝を申し上げます。卒業まで辿りつけたのは、周囲の皆様に恵まれていたおかげです。ありがとうございました。



歲月人を待たず

資源生物科学科 植物病理学研究室 松尾 百華

2020年に名古屋大学へ入学してからはや4年。振り返れば、あっという間だった。多くの学友、頼りになる先輩や先生方に恵まれ、充実した毎日を過ごしたからこそ、1400日を優に超える年月が、まるで瞬きの間の如く感じられたのだろう。その中から、ここへ書き記す出来事を選ぶとすれば、やはり3年次に参加した国内実地研修および海外研修である。

私は全く英語ができない。きっと佐賀弁と日本語のバイリンガルだからだ。脳のメモリが佐賀弁に割かれているに違いない。このような言い訳をしながら生きている私が研修に参加を決めたのは、「歲月人を待たず」という言葉の存在が大きい。時間は私を待たないし、私も変化する。今、面白そうと思えるものが、来年もそうであるかは分からないのだ。そういうわけで、「なんとかなれ」の精神で研修に参加してみたのである。

研修は無論大変だった。しかし、非常に楽しかった。日本と海外で、文化、植生、言語、食、農業形態など、何もかもが互いに違うが、その違いがとても面白かった。教科書で見たり読んだりしたものが実際に目の前に存在する感動は、並大抵の言葉では言い表せない。そして何より、人の優しさに触れたことが今も心に残っている。私の慣れない英語に耳を傾け、私が理解できるまで様々な単語を用いて説明してくれた海外の友人たち。タイで入院した際、英語が不得意ながらも、身振り手振りを入れて説明してくれた看護師の方々、そして、文字通り寝食を共にし、多くの課題を乗り越えた日本の友人たち。友人らに関しては国内外問わず、未だに皆と交流がある。他の何にも代えがたい存在を得られたことも含め、この研修に参加して良かったと思う。

最後になりましたが、今日の良き日に門出を迎える友人、先輩方の行く先に、幸の多からんことを祈念しております。そして、大学院に進学する友人、研究室の先生・先輩方、家族の皆様、来年以降もよろしくお願ひします。



不自由と自由の大学4年間を振り返って

応用生命科学科 分子細胞制御学研究室 奥田啓介

農学部の4年間を振り返ると、入学前のイメージとは異なる日々を過ごしたと思えました。入学前には、サークル活動に参加し学部の友達をつくと意気込んでいました。しかし、コロナウイルスの影響でオンライン授業と自宅学習を余儀なくされました。オンライン授業は効率的で自主学習するのに適していましたが、新しい人間関係を作れず対面授業が恋しくなりました。顔を合わせてコミュニケーションをとる重要さを分かりつつも感染防止のために行動制限される板挟みの状況が大変だったです。そのような状況の中でも「できることを日々やる」と決めて色々なことにチャレンジしました。語学学習、読書、アルバイト、楽器演奏、旅行、料理など思う存分経験することができました。

大学2、3年になると対面授業が再開し友達をつくることやサークル活動に参加することができるようになり大学生らしい生活を送る幸福がありました。授業内容が高度かつ専門的になり学生実験が始まり忙しくも充実した毎日でした。

昔から好奇心が強く、知りたいことがあればひたすら調べて考えるクセがあり物足りないと思うことがよくありました。大学は巨大な知識の宝庫であり、論文や専門書を好きなだけ読み授業に積極的に聴講し好奇心を満たすことができました。そのような好奇心を正面から受け止めてくれる先生方との対話ができたと楽しかったと思えます。大学院生の頼もしい先輩方に助けをもらいながら学生実験を通して高校で学んだ知識を確認したときには何ともいえない高揚感がありました。また、高校の知識をさらに深く学んだことで、先人の偉大さや知識の蓄積を実感し脈々と続く科学の進歩に心を奪われました。

実験して新しい知識を得たいと、実験が盛んな分子細胞制御学に配属になりました。研究分野をしっかりと勉強し実験も上手いと思うていました。しかし、勉強とは違い実験には失敗やわからないがよくあるということでした。何度やっても上手いいかない時があり、そのときに先輩や先生がアドバイスを頂き同じ実験を繰り返してできるようにしました。実験手法が確立してくると自分の考えた実験をつくり進めていく。コツコツと情熱を持って好きなだけ実験することができて大学に入学して本当に良かったと感じました。大学4年間の経験を「不易流行」として刻み次の進路でも生かしていきたいと考えています。



修了に際して

動物科学専攻ゲノム・エピゲノムダイナミクス研究室 石川峻遥

少年老い易くとは申しますがふと気づけば修士課程も終わりを迎えており強くこの言葉を実感します。楽しい時間は過ぎるのが早いものですから、烏兔忽忽であった名古屋大学でのこの6年間で濃密で幸福な時間であったということでしょう。

修士課程の大半を占めたのは研究活動でした。私の研究はとある非モデル生物におけるほとんどこれまでに知見が得られていない現象をテーマとした新規のものでした。このためまずゲノムを解読するところから始めなければならず、また研究室が持たない知識・技術を多く求められたこともありなかなか思うように進みませんでした。望ましい結果が得られたと思ったら偽陽性でぬか喜びだったということもありました。しかし、その過程で自ら学び、試行錯誤しながら成長する貴重な経験と広範な分野についての知識を積むことができました。また私にとって幸運だったのは、人に恵まれたことでした。学部の4年間で出会った同期やサークルのメンバー、大学院進学後に深く関わった研究室やGTRの戦友といった人々の存在が私の成長と学びに大きな影響を与えました。彼らの助けや励ましは、私の研究活動を支えるだけでなく、人間としての成長も促しました。研究には未だ期待するような成果は得られず、また自身の学が成ったとは到底思っておりませんが、それでも修士課程を終えることが出来そうなのは偏に周囲の人に恵まれたからこそだと思っています。私は博士後期課程に進学するため、あと3年ほど学生生活を謳歌する予定です。相変わらず思うように進まない研究と不安定な生活の間で板挟みになることもあるでしょうが、その中で新たな挑戦や発見を楽しみながら、私自身が他の誰かにとっての恵まれた出会いとなれたのであれば幸いです。

最後になりますが、辛抱強く指導して下さった研究室の先生方や学生生活を支えてくれた家族に、心より感謝いたします。そして春から社会人として新たな道を歩む皆様の人生が幸多きものとなることを心より願っています。



令和5年度総会、講演会、懇親会、同窓生在籍企業紹介の報告

令和5年度の総会を名古屋大学ホームカミングデーにあわせて、令和5年10月21日（土）に農学部第12講義室にて開催いたしました。会長ならびに名誉会長の挨拶に続き、事業・決算報告を行った後令和5年の役員選出を行いました。また令和5年度の事項計画・予算を審議しました。総会には35名の方にご出席いただきました。講演会は藤井 潔氏（愛知県米麦振興協会、1979年卒）によるご講演「名大スピリットが教えてく

れた「見果てぬ育種の夢」へのチャレンジ精神」を第12講義室において開催しました。50名の参加があり大変盛況となりました。また今年は同窓生在籍企業による企業紹介を行いました。同窓生が在籍する9企業がポスター掲示により現役学生に企業紹介を行いました。多数の学生が参加し盛況となりました。

また夕方にはコロナ後初の交流会を第7講義室において開催し、親睦を深めました。

昭和48年卒業生および修了生（満期退学）の卒業50周年記念祝賀会の報告

令和5年10月21日（土）名古屋大学農学部大会議室において、農学部談話会との共催により昭和48年卒業生および修了生（満期退学）の卒業50周年祝賀会を開催いたしました。10名の卒業生の皆様をはじめ、談話会会員、現職員、および同窓会役員合計47名の出席で盛大に行われました。祝賀会では、同窓会会長 小川雄二様、ならびに生命農学研究科長・農学部長 中園

幹夫教授よりご挨拶をいただきました。続いて農学部談話会会員 山根恒夫名誉教授の乾杯のご発声の後、昼食、歓談となりました。出席いただいた方々から自己紹介と近況についてのご報告をいただき、会は和やかな雰囲気の中進行しました。また、互いの旧交を温めておられました。

人事異動（2023年1月1日～2023年12月31日）

日付	氏名	異動内容	職名	所属
2023.2.1	渡邊 健史	昇任	准教授	大学院生命農学研究科応用生命科学専攻
2023.2.28	関 真由子	退職	特任助教	大学院生命農学研究科森林・環境資源科学専攻
2023.3.1	村中 智明	採用	助教	大学院生命農学研究科応用生命科学専攻
2023.3.31	森 仁志	定年退職	教授	大学院生命農学研究科応用生命科学専攻
2023.3.31	松本 省吾	定年退職	教授	大学院生命農学研究科植物生産科学専攻
2023.3.31	小鹿 一	定年退職	教授	大学院生命農学研究科応用生命科学専攻
2023.3.31	上口美弥子	定年退職	教授	生物機能開発利用研究センター
2023.3.31	野田口理孝	退職	准教授	生物機能開発利用研究センター
2023.3.31	服部 浩之	退職	特任助教	アジアサテライトキャンパス学院国内教育部門
2023.4.1	青木 弾	昇任	准教授	大学院生命農学研究科森林・環境資源科学専攻
2023.4.1	野田口理孝	任期付採用	特任教授	生物機能開発利用研究センター
2023.4.1	黒谷 賢一	昇任	特任准教授	生物機能開発利用研究センター
2023.4.1	RATTANAJEARAKUL Nawarat	任期付採用	特任助教	大学院生命農学研究科応用生命科学専攻
2023.5.31	SONSRI Kiattisak	退職	特任助教	大学院生命農学研究科名古屋大学・カセサート大学国際連携生命農学専攻
2023.7.1	梶村 恒	昇任	教授	大学院生命農学研究科附属フィールド科学教育研究センター森林科学部門
2023.7.1	伊藤 智和	昇任	准教授	大学院生命農学研究科応用生命科学専攻
2023.7.1	古川 恭平	採用	助教	大学院生命農学研究科動物科学専攻
2023.7.31	Joyce Cartagena	逝去	准教授	大学院生命農学研究科植物生産科学専攻
2023.8.31	CHEN Junfeng	退職	特任助教	大学院生命農学研究科動物科学専攻
2023.9.1	竹本 大吾	昇任	教授	大学院生命農学研究科植物生産科学専攻
2023.11.1	柴田 秀樹	昇任	教授	大学院生命農学研究科応用生命科学専攻
2023.11.1	田邊 彰	採用	助教	大学院生命農学研究科動物科学専攻
2023.11.1	ONGSIRIMONGKOL Paratthakorn	任期付採用	特任助教	大学院生命農学研究科名古屋大学・カセサート大学国際連携生命農学専攻

（人事係より提供された情報をもとに作成しました。糖鎖生命コア研究所への異動関係は除いております。）

2023年度名古屋大学大学執行体制・全学組織における役職者 (生命農学関係分)

審議役	川北 一人	統合生命医科学糖鎖研究センター所長（センター長）	
副総長（男女共同参画・多様性担当）、機構長補佐			佐藤ちひろ
	束村 博子	トランスフォーマティブ生命分子研究所拠点長	吉村 崇
評議会選出評議員	池田 素子	附属図書館副館長	浅川 晋
評議会選出評議員	山崎真理子	高等研究院副院長	榎原 均
アジアサテライトキャンパス学院長	山内 章	学術研究・産学官連携推進本部副本部長	福島 和彦

農学部・生命農学研究科同窓会ホームページ案内

同窓会の活動は農学部・生命農学研究科同窓会（セコイア会）ホームページでもご覧いただけます（<https://www.agr.nagoya-u.ac.jp/~dosokai/>）。住所変更・寄付金・会費などのご案内もございますのでぜひご覧ください。ホームページに関するご意見・ご要望がございましたらお寄せください（HP担当：inatetsu@agr.nagoya-u.ac.jp）。

一般社団法人名古屋大学農学部・生命農学研究科同窓会 令和4年度（令和4年9月～令和5年8月）事業報告

1. 名古屋大学農学部同窓会（旧同窓会）からの会員・財産の移行

令和4年（2022年）9月1日をもって、名古屋大学農学部同窓会（旧同窓会）の事業・会員（15,714人）・財産（現預金23,364,656円ほか）のすべてを、一般社団法人名古屋大学農学部・生命農学研究科同窓会が継承した。

2. 名古屋大学農学部・生命農学研究科との連携協力に関する覚書交換式

名古屋大学農学部・生命農学研究科との連携協力に関する覚書交換式を開催した。

3. 総会の開催

令和4年10月15日、名古屋大学農学部第12講義室において総会を開催した（対面とオンラインのハイブリット開催）。

4. 卒業・修了50周年記念祝賀会の開催

令和4年10月15日に卒業・修了50周年を迎えた方をご招待し、農学部卒業50周年記念祝賀会を開催した。あわせて、過去2年間に延期した令和2年10月または令和3年10月に卒業・修了50周年を迎えた方の農学部卒業50周年記念祝賀会を開催した。

5. 農学部創立70周年記念事業の共催

令和4年10月15日に名古屋大学農学部との共催で農学部創立70周年記念事業「名古屋大学から発信する新しい農学～現在・過去・未来～セコイアと共に～」を開催した。名古屋大学農学部第12講義室において、各界でご活躍されている4名の卒業生によるご講演、そしてコメンテーターも参加するパネルディスカッションをした。

【講演】

土川 覚（生命農学研究科長・農学部長）

「名古屋大学農学部・生命農学研究科のいま」

小坂善太郎（林野庁森林整備部長）

「日本の森林過去・今・未来～伐って使って植える循環によるグリーン成長を目指して～」

川合 豊彦（農林水産省大臣官房技術総括審議官兼農林水産技術会議事務局長）

「みどりの食料システム戦略」

中嶋 真一（豊橋飼料株式会社テクニカルセンター執行役員）

「家畜用飼料の現状と将来について」

吉田 康（株式会社ブルボン代表取締役社長）

「食品企業の経営」

【コメンテーター】

小川 雄二（同窓会長）

石川 靖文（同窓会関東支部長）

加藤 壽郎（同窓会関西支部長）

束村 博子（生命農学研究科教授・名古屋大学副総長）

【司会】

池田 素子（生命農学研究科教授）

6. 卒業・修了祝賀会の開催

令和5年3月25日に卒業・修了祝賀会を開催した。

7. 秋季卒業・修了祝賀会における記念品配布

秋季卒業・修了祝賀会において記念品を配布した。

8. 会報「セコイア通信」の発行

令和5年3月に発行した。

9. 同窓生の参加を促す事業の考案、連絡体制の強化

同窓生が同窓会に参加しやすくなるよう事業を考案する。またメールアドレスの収集など、同窓生への連絡が円滑に行えるようにした。さらにホームページも利用し、同窓生への連絡体制を強化した。

10. ホームページの作成と管理

同窓会ホームページのアップデートを完了するとともに一層の充実を図った。

11. 事務局機能の充実

同窓会が一般社団法人化したため、事務局機能の整理が必要となる。

理事・監事・幹事・事務局の仕事を整理し、適宜削減・拡充を行った。

12. 支部活動の支援

卒業生への名簿適用など、支部活動への支援を行った。

13. 資産運用計画の立案

資産運用計画の提案を行った。

14. 同窓会名簿データの管理

同窓会名簿データの更新を行うとともに、要請に応じて名簿情報の提供を行った。

15. 全学同窓会への協力

全学同窓会幹事会に役員を出し、運営に協力した。

16. 新規事業の考案

農学部・生命農学研究科同窓会の交流を活性化するための新たな事業を考案した。

一般社団法人名古屋大学農学部・生命農学研究科同窓会
令和5年度(令和5年9月ー令和6年8月)事業計画

1. 総会の開催

令和5年10月21日、名古屋大学農学部第12講義室において総会を開催する。

2. 卒業・修了50周年記念祝賀会の開催

令和5年10月21日に卒業・修了50周年を迎えた方をご招待し、農学部卒業50周年記念祝賀会を開催する。

3. 同窓生在籍企業紹介の共催

令和5年10月21日に名古屋大学農学部との共催で同窓生在籍企業紹介を開催する。

4. 講演会の開催

令和5年10月21日に名古屋大学農学部第12講義室において、講演会を開催する。

講師:愛知県米麦振興協会 藤井 潔 氏

演題:「名大スピリットが教えてくれた「見果てぬ育種の夢」へのチャレンジ精神」

5. 交流会の開催

令和5年10月21日に名古屋大学農学部第7講義室において、交流会を開催する。

6. 卒業・修了祝賀会の開催

令和6年3月25日に卒業・修了祝賀会を開催する。

7. 秋季卒業・修了祝賀会における記念品配布

秋季卒業・修了祝賀会において記念品を配布する。

8. 会報「セコイア通信」の発行

令和6年3月に発行する。

9. 同窓生の参加を促す事業の考案、連絡体制の強化

同窓生が同窓会に参加しやすくなるよう事業を考案する。またメールアドレスの収集など、同窓生への連絡が円滑に行えるようする。さらにホームページも利用し、同窓生への連絡体制を強化する。

10. ホームページの作成と管理

同窓会ホームページのアップデートを完了するとともに一層の充実を図る。

11. 事務局機能の充実

同窓会が一般社団法人化したため、事務局機能の整理が必要となる。

理事・監事・幹事・事務局の仕事を整理し、適宜削減・拡充を行う。

12. 支部活動の支援

卒業生への名簿適用など、支部活動への支援を行う。

13. 資産運用計画の立案

資産運用計画の提案を行う。

14. 同窓会名簿データの管理

同窓会名簿データの更新を行うとともに、要請に応じて名簿情報の提供を行う。

15. 全学同窓会への協力

全学同窓会幹事会に役員を出し、運営に協力する。

16. 新規事業の考案

農学部・生命農学研究科同窓会の交流を活性化するための新たな事業を考案する。

17. 名簿の発行

名簿の発行を行う。

18. 持続可能な財政管理の検討

慢性的な赤字体質を脱却するため、財政の改善について次のような方策を中心に検討する。

(1) 会費納入率の向上

(2) 収益事業

(3) 寄付金の増額(同窓生、会員、同窓生の関係する法人などへの依頼強化)

一般社団法人名古屋大学農学部・生命農学研究科同窓会 令和4年度決算

令和4年9月1日～令和5年8月31日

【収入の部】

単位：円

費目	金額	細目	金額	備考
会費等 (会費等のうち未収分95,000)	765,000	永年会費	640,000	32名 (20,000円/名)
		一般会費	125,000	25名 (5,000円/名)
寄附金収入 (寄附金収入のうち未収分168,000)	758,000	寄付金	758,000	147名
事業収入	88,770	広告掲載費	88,770	6件
前年度繰越剰余金	23,364,656			
合計	24,976,426			

(実質収入 1,611,770)

【支出の部】

費目	金額	細目	金額	備考
会報発行費	1,938,008	会報印刷費	528,000	10,000部 (8,900部発送)
		発送費	1,410,008	
令和4年度総会	74,672	講演料	0	70周年事業として農学部が負担
		講師交通費	0	70周年事業として農学部が負担
		役員交通費	40,000	3名
		飲料費	20,000	総会時の飲料水
		事務・通信費	14,672	オンライン会場設置
第17回卒業50周年祝賀会	119,193	飲食代	108,000	
		事務費	11,193	印刷・発送を含む
農学部設立70周年記念事業	1,026,556	案内状発送費	1,024,012	
		講師茶菓代	2,544	
卒業・修了祝賀会	223,972	飲料費	805	役員の飲料水
		記念品代	181,667	
		役員交通費	41,500	4名
ホームページ管理費	0		0	
役員報酬	180,000	役員報酬	180,000	15名×12000
支部支援金	90,000	関東支部	60,000	令和4年度分
		関西支部	30,000	令和4年度分
事務局員雇用	1,000,000	事務局員雇用費	1,000,000	1名
スペースレンタル料	91,200	スペースレンタル料	91,200	4平方メートル
郵便振替手数料	24,811	郵便振替手数料	24,811	
会計士顧問料	55,000	会計士顧問料	55,000	会計士 1名
通信・事務費	41,058	通信・事務費	41,058	オンライン会議費・郵送費など
会費徴収手数料 (未払金)	20,262	会費徴収手数料 (未払金)	20,262	
法人税住民税事業税	26,597	課税納付	26,597	
次期繰越剰余金	20,065,097			
合計	24,976,426			

(実質支出 4,911,329)

一般社団法人名古屋大学農学部・生命農学研究科同窓会 令和5年度予算

令和5年9月1日～令和6年8月31日

【収入の部】

単位：円

科目	金額	細目	金額	備考
会費等	1,690,000	永久会費	800,000	40名
		一般会費	200,000	40名
		寄付金	600,000	60名
		広告掲載費	90,000	6件
卒業50周年祝賀会会費	70,000			2,000円×35名
令和5年度総会懇親会費	35,000			1,000円×35名
前年度繰越金	20,065,097			
合計	21,860,097			

(実質収入 1,795,000)

【支出の部】

科目	金額	細目	金額	備考
会報発行費	1,950,000	会報印刷・発行費	1,950,000	10000部 (8900部発送)：サラトとクイックス
令和5年度総会	208,000	講演料	30,000	
		講師交通費	3,000	
		役員交通費	40,000	3名
		懇親会費	135,000	
卒業50周年祝賀会	75,000	飲食代	60,000	
		印刷発送費	15,000	招待状
卒業・修了祝賀会	280,000	飲食代	110,000	
		記念品代	130,000	
		役員交通費	40,000	3名
秋季卒業・修了祝賀会	10,000	記念品代	10,000	
支部支援金	150,000	関東支部	120,000	令和5年度分
		関西支部	30,000	令和5年度分
役員報酬	180,000	理事、幹事	180,000	15名×12000
会計士報酬	55,000	会計士	55,000	1名
事務局員の雇用	1,000,000	事務局員の雇用	1,000,000	1人
事務室のレンタル料	91,200	事務室のレンタル料	91,200	4m ²
その他諸費用	105,000	支払手数料	40,000	郵便振替手数料、送金手数料など
		課税納付	30,000	役員報酬・講演料・アルバイトなど
		通信費	25,000	発送費など
		事務費	10,000	文房具など
新規事業	50,000		50,000	同窓会活性化のための新規事業
次期繰越剰余金	17,705,897			
合計	21,860,097			

(実質支出 4,154,200)

令和5年度 同窓会役員

名誉会長	中園 幹生（研究科長・植物遺伝育種学）	幹事（総務）	柴田 秀樹（分子細胞制御学）
会長	小川 雄二（学外）		本道 栄一（動物形態学）
理事（副会長）	福田 秀志（学外）		佐藤 育男（植物病理学）
（関東支部長）	石川 靖文（学外）		仲田 麻奈（熱帯生物資源）
（関西支部長）	加藤 壽郎（学外）	幹事（会報）	岩永 青史（森林社会共生学）
幹事長	稲垣 哲也（生物システム工学）	幹事（会計）	武田 真（植物細胞機能）
副幹事長	柴田 秀樹（分子細胞制御学）		大谷 仁志（ゲノム・エピゲノムダイナミクス）
監事	藤井 潔（学外）	幹（名・ホムペーシ）	稲垣 哲也（生物システム工学）
監事	中道 範人（植物統合生理学）	事務	赤池 美紀子

関東支部だより

関東支部長 石川 靖文（S56食D）

関東支部では、初夏の「新卒者歓迎会」（副支部長担当）と晩秋の「総会」（支部長担当）を定例としている。開催場所は、ともに東京・神田錦町の学生会館である。

「歓迎会」は、令和5年6月10日（土）に開催した。新卒者5名と支部役員8名の13名が参加した。会館内の名古屋大学東京連絡所に集合、挨拶・自己紹介、和食レストラン二色で会食・歓談、会館施設巡り、皇居東御苑散策の後に有志で二次会、懇親を深めた。新卒者からは「初めは緊張したが、すぐ気軽に話せた」「秋の総会にも参加したい」などの感想が寄せられた。

「総会」（第26回）は、令和5年10月14日（土）に開催した。参加者は、会場24名、リモート10名の合計34名であった。関西支部会員の方々、中部地区会員の方々、全学同窓会関東支部岸事務局長、学生会事務局薄井マネージャーなどにもご参加いただいた。

総会議事の部では、近藤幹事の進行で、小職の挨拶、横井監査役の会計監査報告に次いで、本部幹事長の福島先生に、本部の状況についてお話しいただいた後、次年度役員を選出を行った。特別講演の部では、小西副支部長の進行で、副総長（多様性・男女共同参画担当）・大学院生命農学研究科動物生殖科学研究室教授の東村博子先生（H3畜D）に「哺乳類の生殖機能を制御する中枢メカニズム」と「社会の活性化戦略としてのジェンダー平等推進」について、一般会員の横山昌太郎さん（H8林M）に「森に学ぶ～植物進化の歴史×ウェルビーイング～」について、お話を伺った。

総会議事では、会計監査が承認され、次年度役員についても現執行部の再任が承認された。本部の活動については、本誌別記事をご参照いただきたい。

東村先生の講演は、自己紹介から始まった。先生は、中学・高校・大学と金城学院のいわゆる【純金】であったが、研究に魅力を感じ、改めて名古屋大学農学部に進学されたとのこと。「農学は平和の学問」の使命感のもと、家畜の生産性を上げるために、動物の繁殖制

御機構の解明と応用を目指される一方、大学のジェンダー平等事業に携わって20年とのことであった。

先生のご研究は、脳の視床下部弓状核に分布し、哺乳類の生殖に不可欠な繁殖中枢であるキスペプチン・ニューロンの作用機序に関するものであった。同ニューロンから放出される神経ペプチド・ホルモン「キスペプチン」が、GnRH（性腺刺激ホルモン放出ホルモン）放出を促進、これが黄体形成ホルモン（LH）放出を促し、卵胞の発育を促進する一といった一連のスキームを詳細に説明された。泌乳（乳首への刺激）、低栄養、ストレス、低濃度エストロゲンなどは同ニューロンに抑制的に作用するとのこと、このメカニズムは、哺乳類では、ヒト、サル、ヤギ、ブタなどの種を超えて共通。交尾排卵動物では、交尾でキスペプチン・ニューロンが活性化されるとのこと。今後は、一連の研究成果を家畜の効率的な生産やヒトの生殖機能障害の治療などに応用していきたいとのことであった。

「ジェンダー平等事業」では、全国の大学や各機関、自治体等で150回以上の講演やパネルディスカッションを行い、新聞等でも多数のインタビュー記事が掲載されてきたとのこと。ジェンダー平等を推進するには「無意識のバイアス」（Unconscious Bias：UB）の克服が重要であることを力説された。

名古屋大学における具体的な男女共同参画活動としては、①学内保育所・学童保育所設置、②女子中高生理系進学推進セミナー、③女性リーダーシップセミナー、④女性教員増員策、⑤ Well-being in Asia 実現のための取り組みなどについて話されたが、そういった活動の結果、2015年、名古屋大学は、国連機関（UN Women）より、「女性の活躍を推進する世界10大学」として、日本で唯一選出され、ご自身も、2022年、内閣府男女共同参画局の「女性のチャレンジ支援賞」を受賞されたとのことであった。今後は、女性のライフイベントに応じた施策が必要で、介護社会での働く女性支援への対応が重要になろうと締め括られた。

質疑応答は、男女共同参画活動に集中した。大学でのUB克服の抵抗勢力は？—「20年もやっているけどだんだん抵抗が少なくなってきた」とのこと。参加者か

らの、友人の女性研究者が、学内保育園のお陰で大いに助けられた一との発言には「頑張ってきてよかった。涙が出てきそう」とか。リモート参加者には先生の元指導生もあり、思い掛けない師弟の出会いとなった。

横山さんの講演は、「私はお坊さんではありません」のギャグ(ツカミ)から始まった。その風貌からお坊さんとよく間違われるとのこと(写真ご参照)。

横山さんは名古屋市ご出身、大学院後期博士課程を中退して中央官庁に入省。当時はもの凄く忙しく、上司から「今日は早く帰っていい」と言われるのが夜の11時。朝5時に帰るのは当たり前。ある年の2月深夜、気が付いたら新橋、雨の路上をフラフラ歩いていた。こんなことではいけないと退職。現在は香川県在住。日本人は本当に幸せか?一との問題意識のもと、自然界の理解、すなわち動植物の幸せを通して人の幸せを考える活動をしているとか。森には様々な生き物が棲んで(共生して)いる。人々の価値観をより良い方向に持っていきたいという思いから、地元の人を対象に、森の案内人をしているとのことである。

講演内容は、自然観察と自然科学の知見に基づく文明論の様相を呈したものであった。陸上植物が地上に進出したのは5億年前であるが、生物を進化の優劣で論じるのは的外れ。どの生物が進んでいるというわけではなく、ライフ・スタイルが違うだけという認識が重要。森には色々な生き方があり、自活だけでなく寄生しているものもある。生命は何処かで他の生命と繋がっている。生命の多様な営みのなかに Well-being (幸福)のための学び(気付き)がある。森では土が豊かになり多くの生命を育てているが、現代社会はその貯金を取り崩している。農業の母体である土を、森の視点から見直すのが喫緊の課題である一と締め括られた。

時間の都合で質疑応答は割愛されたが、参加者一同、具体的な実践に裏打ちされた、スケールの大きな話に感じ、聴き入っていた。

横山さんの活動の詳細は、下記で知ることができる。
・森さんぽ: <https://sites.google.com/view/morisanpo/>
講演終了後は、学生歌斉唱、集合写真撮影、休憩の後、松本幹事の進行で懇親会に入った。飲食をしなからの近況報告に一同大いに盛り上がった。会の終了間際、本部副会長の福田先生がご来場、ご挨拶をいただいた。中締め後は、有志で二次会、更に懇親を深めた。



今回の特別講演については、東村先生の「ジェンダー平等推進」部分と横山さんの全体が、学士会の Web 総合情報誌『NU7』2024.5 No.53に掲載の予定である。

次回、新卒者歓迎会は本年6月8日(土)に、第27回総会は同11月9日(土)に開催の予定である。

支部 HP: <http://www.nua-alumkanto.sakura.ne.jp/>
支部連絡先 E-mail: alum-kan@agr.nagoya-u.ac.jp

関西支部だより

関西支部長 加藤 壽郎 (S45農 M)

関西支部は、コロナ禍の間、例年11月の同窓会総会を全く開催できませんでした。そこで、同窓会活動の維持発展を目指し、2022年3月より、関西支部の同窓会報を年二回、3月と9月にメール配信することとしました。会員の皆様からの積極的なご寄稿をいただきまして、これまでに第四号までの配信を終えております。ご寄稿の内容は様々ですが、第四号の例では、

- ・ COVID-19の検査と合唱活動雑感(北川正成さん、昭59農化)
- ・ ロシアのウクライナ侵略戦争・COVID-19パンデミック前の世界の食料供給状況(馬路泰藏さん、昭40農化)
- ・ 水彩画をはじめました 趣味の一つとして(岩津良秋さん、昭47農化)
- ・ 還暦を迎えて(住達彦さん、昭61林)
- ・ ヨガについて(長谷川(北島)章子さん、昭56農化)
- ・ マツ枯れ、ナラ枯れ、サクラ枯れ、すべて「密」が誘引ではないか(田中和博さん、昭51林)
- ・ コロナ禍で幼児と過ごし感じたこと(酒井(青田)友美さん、平19生技 M)

の7点をお寄せいただきました。第四号につきましては、名古屋大学農学部・生命農学研究科同窓会のホームページの支部行事にアクセスいただければ、ダウンロードしてお読みいただけます。是非、ご覧になってください。

さて、コロナが第五類に分類され、2023年は4年ぶりに11月11日に関西支部の同窓会総会を開くことができました。今回は14名のご参加をいただき、朝10時から午後3時まで、楽しいひと時を過ごしました。例年の総会では、総会議事後、同窓生の方にご講演をいただいております。この度は、タカラバイオ(株)の参事でいらっしゃる北川正成さん(昭59農化)に「ゲノム解析技術の進歩と社会のかかわり」と題してご講演をいただく予定をしておりました。北川さんは、PCR検査試薬の開発と供給や新型コロナ mRNA ワクチンの製造などに携わってこられた方で、大変時宜を得たお話しとして期待しておりました。ところが、総会二日前に、北川さんのご母堂様をご逝去されるというご不幸がありまして、急遽、ご講演を中止せざるを得ない事態となりました。大変残念な状況となりました。

たが、空いた時間を有効に使うため、出席された会員の方、全員に、大学時代の思い出などをお話いただくこととしました。たとえば、名古屋大学農学部入学の動機、在学中の印象的な出来事、記憶に残る先生のこと、思い出に残る友達、先輩、後輩のこと、在学中に学んだこと、卒業後の人生への影響、関西セコイヤ会参加の動機、きっかけ、などです。これまでの総会では、会員の方からお話いただくのは、懇親会での近況報告が中心でしたので、これはこれで、大学時代のことを改めて思い出して話し合う良い機会となりました。似たような思い出話があったり、初めて何うようなお話であったり、同じ先生にお世話になっていたりと、結構、盛り上がりました。ご講演の時間は1時間20分程度取っておりましたが、皆様、要領を心得ておられて、この時間をフルに使って、有意義なひと時となりました。

当日の午後は、例年、3時間かけての懇親会です。皆様から、近況の報告をいただきました。皆様、それぞれに様々な日常を送っておられ、趣味、目標、問題意識などをご披露され、時間のたつのも忘れて有意義な懇親会となりました。

同窓会関西支部は、現在の役員として、支部長：加藤壽郎、事務局：寺前朋浩、会計：井野右文、会計監査：野村章、顧問：入野哲朗が担当しておりますが、同窓会活動の一層の活発化のため、新たに、駒田肇さん（S55林産D）、大賀久美子さん（S54農化）、沖森泰行さん（S56林）のお三方に顧問として幹事会にご参加いただくこととなりました。今後ますます関西支部の同窓会活動が活発になるものと確信しております。

2024年度は、3月に同窓会報第五号の配信、9月に同会報第六号の配信、また、11月9日（土）に同窓会総会を予定いたしております。連絡先は以下の通りです。ご参加希望の方は、是非、ご一報ください。

（事務局）寺前 朋浩（昭61生M）

〒669-1103 兵庫県西宮市生瀬東町37-23

E-mail：kssequoia23@gmail.com



名大遠州会だより

佐々木 健（H5畜）

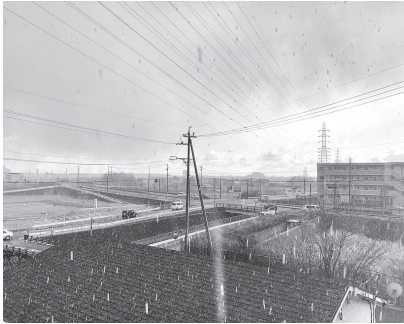
名大遠州会は、静岡県西部（大井川以西）に居住または勤務する名古屋大学、大学院またはその前身校出身者から構成され、平成8年に設立されました。同窓会を毎年、また総会は隔年で開催しています。しかしながら、ここ数年はコロナ禍の影響により開催中止が続いており、令和5年も、開催可否の議論を重ねましたが、開催場所等の問題もあり引き続き中止となってしまいました。本年（R6年）に関しましては、近々幹事会が開かれそこで開催について話し合いをする予定です。最近のコロナ禍に対する社会情勢を鑑み、本年は開催の方向に進むと思われまますので、遠州会同窓会を心待ちにしていらっしゃる皆さまにおかれましては、ご期待していただいでよいのではないか…と思っております。

ここで、例年同様、初めて遠州会のことをお知りになる方に向けて、毎年の内容を簡単に説明いたします。毎年6月の第二土曜日に70～80名前後の会員が集まり、名古屋大学総長や全学同窓会副会長も来賓としてお招きして90分ほどの同窓会（懇親会）を開催しております。また、ビンゴゲームやミニコンサートなども余興として盛り込んでおり参加者全員が楽しめる企画になっております。本年につきましては、開催の判断がなされれば、遠州会会員の皆様には開催案内を郵送にてお知らせする予定です。何卒よろしくお願いたします。また、遠州地区にお住まいでこのセコイヤ通信にて本「遠州会」にご興味をお持ちになられた方（名古屋大学農学部や大学院生命農学研究科の卒業生）は、当方にメール等でご連絡くださればご案内いたします。

さて、本年のセコイヤ通信も遠州会の同窓会に関して記載する内容が少ないので、ここからは私佐々木が例年同じく、静岡県や遠州地区に関する自由な？書いてみようと思います。

以前、この「名大遠州会だより」でも取り上げたことがあります。静岡県は特に横に長い県で、新幹線の駅がなんと国内最多の6つある県です（ただし新幹線駅6つ全てを即答できる人は静岡県でも多くない…）。そんな東西に長い静岡県ですが、気候は比較的温暖で、特に平野部で雪がほとんど降らないことは共通しています。ミカンが名産なもの、そんな温暖で日照時間が長いところに起因しているのでしょう。

しかし近年は気候変動の影響からか、2～3年に一回程度の割合で雪が降ったり、うすら積もったり、また路面が凍結するようなことが見られるようになりました。そうすると静岡県人、特に私が住む浜松の人たちは大騒ぎ（最初は珍しい雪に大喜び）になりますが、あわせて交通の麻痺という大問題も引き起こされます。本当に夜に5ミリ雪が積もっただけで、翌朝には交差点で滑って動けなくなる車や路上でスピンして



そのまま放置されている車、さらにはスリップしてちょっとした坂が登れずそこを起点に大渋滞なんて光景が見られます。他にも、雪で滑って転倒する人も多数見られます。そんな時、積雪がよく見られるような地域（他県）から移り住んだ人たちは「静岡県の人は雪に慣れていないからなぁ〜」というのが口癖です。名古屋大学がある愛知県（特に尾張地方）も積雪は珍しくはないので、名大出身の方が初めてこういった光景を目にした時は少し驚かれるかもしれませんね。そして、そんな雪が降り始めた前夜、私は心の中で思うのです…「喜んでる場合じゃないよ…」と。

最後は少し毒舌でしたかね…すみません、親近感を持ったツッコミだと受け取って下さい…（笑）

そしてこれを書いた最後に、もう一つ思い出してしまいました。リニア問題から派生して、静岡県に7つ目の新幹線駅の建設構想（静岡空港駅）が浮上したことを…。

連絡先：遠州会農学部幹事 佐々木健
〒431-3192 浜松市東区半田山1-20-1
浜松医科大学 器官組織解剖学講座
Tel：053-435-2293 Fax：053-435-2290
Email：tsasaki@hama-med.ac.jp

農学部談話会からのお知らせ

農学部談話会は平成14年（2002）年10月11日に設立され、構成員は当農学部・大学院を退職した教職員（有志）となっています。アドレスが分かっている方にはメールで案内をお送りしていますが、アドレスが不明の方が多くなってきました。案内が届いていない場合はメールで連絡いただければありがたいと思います。今回は退職された4名の先生に寄稿頂きました。

2023年の会合では10月21日の同窓会行事（名古屋大学ホームカミングデー）に合流させていただきました。卒業50周年の招待者の集まりには、談話会から山根恒夫先生に挨拶をして頂きました。また山根先生の他に松本哲男・柳沼利信・山木昭平の各先生より近況・心境を語って頂きました。なお、寺島典二・杉山達夫・他の先生から欠席の連絡とお祝いのメールを頂きました。談話会として、引き続き世話人を募集していますので自薦他薦をお願いする次第です。

2023年度の物故者（親族様からご連絡いただいた）は竹村富男（1月17日逝去92歳）及び服部一三（5月26日逝去77歳）の両先生です。ご冥福をお祈りします。

（文責：織田銃一）

「恩師、斎藤先生のこと」

寺島 典二（農学部名誉教授）

* 1941年の春、太平洋戦争の開始直前、私は福井県立大野中学校に入学した。校長の英語学者、斎藤静先生は、「もし日本が戦争を始めれば必ず負ける。欧米には優れた自由の思想がある。絶対に戦争を始めてはならない」と説かれた。しかし斎藤先生以外、日本が負けるなどと予想する者は居なかった。戦争が始まると、多くの学者、芸術家、作家、音楽家なども戦争推進に協力した。私も1945年（16歳）、海軍兵学校に入り、本土決戦に備えて瀬戸内海の島で、米軍への自爆攻撃の訓練を受けていた。8月6日朝、広島原爆の鋭い閃光と身の毛もよだつ轟音を体験した。そして、斎藤先生の予言が正しかったことを、骨身に沁みて分かった。そうして、どれほど多くの優しく働き者で人望と地位のある人たちが皆、信じていることでも、間違っていることがある、一方、たとえ一人でも物事の本質を見抜ける人は、未来を正確に予測することができることを知った。斎藤先生には、広い3次元世界+長い時間=4次元の広い視野・深い歴史認識があったからです。その原動力は合理的思考+人それぞれ理想とする道を歩む自由の思想（4+n次元の思考）です。

* 中・高・大学における勉学の目的は、この思考力・予測力を鍛え、自由の思想を身につけることです。近年の日本の政治、経済、学術など多方面での劣化は、政治家や企業の指導層等の劣化のみならず、これを選ぶ国民の劣化によります。教育におけるこの視点の欠如が一因でしょう。スウェーデンでは、大学院で物事をその根源にまで遡って考察する訓練を受けた人が、中学や高校の教員になり、また大学入試はなく、高校の成績によります。議会は1院制、選挙は政策の内容を見て、常に高投票率です。高レベルの福祉国家が維持されている一因でしょう。4+n次元思考で世界を見れば、学ぶ（真似をする）価値ある所、多々です。

* 最近、米欧・中露の対立が深まり、世界は、徐々に

第3次世界大戦前夜の状況になりつつあります。もし戦争になれば、日本は最前線に立たされ、食糧自給率37%の我が国は、忽ち飢餓列島になるでしょう。あの悲惨な第2次世界大戦では、戦没者の半数以上が餓死であったという貴重な教訓を生かしてほしいものです。

「忘れるための覚書：2024の新春に思うこと」

宗宮 弘明

名古屋の吹上に生まれ(1946)、蒲郡(小学1～5年)で私は育った。放課時には、毎日ドッジボールで遊び、放課後は小さな竹竿で海釣りをした。友人と山(五位山)や海辺で遊んだ記憶もある。当時の遊び場は、路地裏の通路か自然のフィールドであった。表通りに車が急速に増加したが、路地裏はまだ子供の遊び場であった。蒲郡の日本通運では、小学1～2年時にはまだ馬による運送が行われていた。また、竹島水族館の開園は1956年なので高度経済成長時代に私も育ってきたのだ。

高校二年の時、同級生の田村君と偶然、帰途の市電(路面電車、今はもう無い)の中で「将来について」を話すことになった。「僕は、日本史が好きだから、大学で日本史を勉強するつもりだ!」と彼は快活に話した。「宗宮はどうするの?」と聞かれて、「まだ考えていないけど、海で育ったから、魚か海の生物学を…」と曖昧な返事をした。すると、田村君は「僕のオヤジは、魚の研究をしているから日曜日にでも来て、相談してみたら!」と気楽に、予想外の返事をくれた。これが、水産学教室・田村保教授の下で修士・博士・ODと約10年にわたる「魚類研究」開始のキッカケであった。

退職後、予測しなかったことに、中部大学応用生物学部で環境生物学を教えることになった。4月からの新しい講義の準備をしていた2011.3.11に東日本大震災が起こった。この震災によって、津波の恐ろしさと、震災に端を発する原発事故の凄まじさを知ることができた。中部大での7年間は環境問題を解決するための講義に、その後の4年間は大学院の改革プログラムの作成に取り組んだ。残念ながら研究はほとんど進展できなかった。しかし、環境問題の解決は、我々がどんな社会を目指すのかと言う問題に直結するものであり、高等教育はその問題にどう対応するのかを問うものであった。これらの経験によって、私は「より豊かな社会を目指すために、大学はどんな教育を目指すべきか」と言う問題を抱えることになった。

昨年の9月をもって大学を実質的に引退した。今はささやかな自分の研究のまとめと、約60年所属することになった「大学」の役割を楽しみながら愚考している。持続可能な社会において、生命に必須な「食」を生産する「農の営み」に関する学問はとても大切なものである。「我々は大地から生じ、大地に戻る。だから我々は肉体の中で生きているように農業の中で生き

ている。我々が生きている間、我々の身体は動き回る。それは大地の一欠片(ひとかけら)が動き回っているのである」(アメリカの詩人 W. Berry)。この極端に混迷な時代に、生命農学研究科・農学部が「食」の「勇気ある司令塔」になってくれることを期待するのは私だけではない。

「退職一年生」

小鹿 一

2023年3月に退職して早いもので10カ月が経ちました。退職直前の慌ただしさとは違って変わって平穏な毎日を過ごしています。元日に起きた能登半島地震の被害を思えばこの平穏さは当たり前ではない、とつくづく思う今日この頃です。

さて、寄稿といっても何かの提言をできるほどではありませんので、個人的な内容で恐縮ですが、一退職者の近況報告に代えさせていただきます。大学教員の一定数は教育機関等に再就職されてご活躍されている印象ですが、私は無職の年金生活者として第二の人生を歩むことになりました。退職前は家人から「濡れ落ち葉」的存在にならぬよう釘を刺されていましたが、始まってみれば意外と充実した生活が待っていました。研究の残務整理で週に1、2回大学にお邪魔することはありますが、日々の料理、野菜の栽培、体力回復のための運動、登山、自宅のメンテナンス、自治会など、現役時代とは全く違う生活パターンになりました。野菜の栽培は現役時代も小規模に行っていましたが、最近では30種近くに増えました。栄養素、土壌環境、病害虫の知識が重要ですが、農学部在籍したおかげである程度応用が利きます(ちなみにジャガイモなどに感染する疫病菌は私の研究対象でした)。そして新鮮な旬の野菜をたっぷり使って料理をし、生ごみ、野菜屑、剪定屑等は全て畑の土に埋めてリサイクルします。運動も始めたので、まさに「食・健康・環境」の課題解決に農学部在籍時よりもかかわっている実感があります(個人レベルの話ですが)。加えて高校や大学の友人、同期生との交流も再開しました。特に高校の友人とはおよそ半世紀ぶりの再会を先日果たし会話が弾みました。こうした絆を縦にも広げると同窓会となるわけですが、母校の一つとなった名古屋大学農学部・生命農学研究科の発展や社会連携に大きく貢献する本同窓会の益々の発展を祈念しています。

「近況報告—日々を生きる—」

福田 勝洋

定年退職により名古屋を去り、5年間の岡山生活をを経て、2013年から自宅のある茨城県取手市に戻っている。取手市は県南に位置し、広い関東平野のため冬季には自宅の窓から富士山が望み見え、一年中筑波山を見ることができる。

私は今年の秋に傘寿を迎えることになるが、幸い健康で週末にはテニスに興じ、サッカーシーズンにはサポーターとして柏レイソルのホームまで、時には国立競技場まで観戦に行くこともある。こう言うと、元気一杯と思われそうだが、今まで順調にきた訳でなく、2016年には硬膜下血腫で入院手術、2020年には不整脈と診断され、治療薬の服用で症状は無くなったものの薬は欠かせなくなり、2021年には白内障の手術で眼内レンズとなった。医学の進歩の恩恵を受けて、命を永らえ、快食、快眠、快便の健康な生活を送れることをありがたく思っている。

リタイアした人間にとって、健康に加えて大切なのは、生活のリズムと様々な分野の人とのコミュニケーションではないだろうか。幸いなことに、良き友人に恵まれたおかげで、医薬基盤・健康・栄養研究所、霊長類医科学研究センター（筑波）の客員研究員、山階鳥類研究所（我孫子）の特任研究員を取手に戻って以来

続けている。研究の内容と成果は別にして、定期的あるいは不定期に出かけることで、日常生活にリズムが生まれ、コミュニケーションに事欠くことはない。何よりも出かけることで家にいないことを妻が喜んでいる。また、名大退職時に先達から移譲された公益社団法人日本実験動物協会の会長職（非常勤）も16年の長期となり、傘寿になる今年で退くことにしている。

こうした仕事関係だけでなく、近隣のテニス仲間、隔日に入浴に行く交流施設の風呂仲間、以前居住していた町の住宅管理組合仲間などとの交流も続いている。

老いは容赦なくやってくる。一昨年、14年間愛用してきた乗用車を買替えた時、残る人生を考えざるを得なくなった。安全装置を完備した小さなリッター・カーにしたものの、あと何年運転できるだろうか、いつこの世とおさらばすることになるのだろうか。それまではできるだけポジティブに生きたいものと思っている。

農学部の話題 —2023.1.1-2023.12.31—

- ・イネの葉 3D 構造推定 名大 切片観察データ活用 2023.1.11日刊工業
- ・岸義人さん死去 フグ毒合成、名大特別教授 努力家、岐阜の少年期から 2023.1.12中日新聞
- ・岸義人さん死去 悼む声 「本当に残念。美濃加茂の誇り」 2023.1.13中日新聞
- ・岸義人さん死去 「憧れの先輩だった」 小中校生活 美濃加茂で悼む声 2023.1.13岐阜新聞
- ・岸義人さん死去 名大特別教授 フグ毒合成 2023.1.13岐阜新聞
- ・岸義人氏が死去 85歳、フグ毒合成 2023.1.13読売新聞
- ・岸義人さん 死去 2023.1.13毎日新聞
- ・フグ毒、人工的に合成 2023.1.13日本経済
- ・「花咲かじいさんの灰」開花 収穫時期を綾つい温暖化対策 2023.3.19日経新聞
- ・中日新聞オンライン講座 名古屋大学協力講座「動物の世界を覗く」 石川由希名古屋大学理学研究科講師、別所一上原学同高等研究院 YLC 特任助教、萩尾華子同特任助教、河江肖剌高等研究院准教授 2023.6.24中日新聞
- ・深海の光るナマコ 動画を撮影 別所一上原学名古屋大学高等研究院特任助教 2023.6.28朝日新聞
- ・“気軽に学ぼう” オンライン講座 中日文化センター 名古屋大学協力講座 動物の世界観を覗く 2023.7.22中日新聞
- ・日本の米菓 80億人に狙い シュネジャ・レカ・ラジュ亀田製菓会長兼 CEO 名古屋大学大学院修了 2023.8.15読売新聞
- ・秋の褒章に684人 紫綬褒章：榊原均 教授（植物分子生理学研究） 2023.11.2毎日新聞
- ・秋の褒章684人26団体 紫綬褒章：榊原均 教授（植物分子生理学研究） 2023.11.2朝日新聞
- ・秋の褒章684人 紫綬褒章：榊原均 教授（植物分子生理学研究） 2023.11.2中日新聞
- ・秋の褒章684人26団体 紫綬褒章：榊原均 教授（植物分子生理学研究） 2023.11.2読売新聞
- ・FAO ベス・ベクトル事務局次長 水路作りや種苗配り 飢餓解消へ事例熱弁 名大で特別講義 2023.11.16中日新聞
- ・第2回石井健一郎賞に榊原均生命農学研究科教授 植物ホルモン研究 2023.12.17中日新聞

同窓会寄付者一覧

(2023.2.1~2023.12.31)

本年度、農学部・生命農学研究科同窓会に対し以下の方々より寄付金をいただきました。

ありがとうございました。(敬称略)

青木 孝良	青山 幸弘	秋元 孝哉	揚妻 正和	新居(松原)義弘	池田 裕月
井澤 佳昭	石井 隆博	井戸 大也	伊藤 明	伊藤 節嗣	井上 忠彦
今井 正樹	今村(安田)太光子(多摩子)		植田 幸秀	梅村(永津)武夫	梅本 春一
大岩 仁志	大島(加藤)俊三	大田 一博	大橋 治陸	大橋(金沢)祐子	岡村 昌拓
小澤 堯	加古 舜治	春日井 治	片岡 優衣	加藤 壽郎	加藤 直之
加藤 晴彦	加藤 秀樹	加藤 満	門野(奥田)敬子	廉屋 巧	上ヶ平大地
亀江 幸二	川北 陽菜	川角 昌弥	川村 征夫	菊池 樹	岸 雅泰
木村 真人	窪田 宣和	熊谷(伊藤)達昭	栗田幾久男	栗本 重夫	神山 詩織
小林 一清	小林 信一	Conroy(河野)信子		笹本 武志	佐藤 隆英
佐野 晴彦	鹿野 真	篠田 善彦	柴田 邦善	清水 仁志	新海 義秋
杉山 邦雄	鈴木 快征	鈴木(谷津)賢二	鈴木 壽浩	鈴木 春音	鈴木 奏仁
高橋 秀之	城 基義	館本 勲武	田中 静幸	谷内 桂子	築山 昭治
都築 邦夫	坪井 一洋	寺澤 勇	寺田 宗玄	戸田 至映	戸田 信司
中島 茉里	中塚 丈瑛	中村 文音	中村 友輔	成瀬 和也	西澤 洋子
西村 弘行	野原 葵	橋本 和彦	長谷川靖彦	波田 航平	馬場 唯菜
原田 義次	日比野浩二	平岩 大洋	平野 翔紀	平林 良一	深谷 雅博
古田 隆則	細井(井上)力	堀川 知廣	堀川 比敏	松井(高木)諄	松田 寛
松本(金田)和子	松本 空也	松本 豊	丸山 恵実	水上(村上)優子	水野 修一
三津井 宏	村上 敏幸	村瀬 香	望月 孝洋	本山 直樹	森 貴志
森 尚樹	森田 雅也	森信 光夫	安井 里緒	柳沢(斉藤)博史	柳瀬 仁茂
山木 昭平	山際 紳一	山崎 寿子	山下かなへ	山田 哲正	山本 義典
由比 進	横越 英彦	吉田 重方	吉村 悠輔	和佐田裕昭	渡辺 広次

以上、130名の皆様

全学同窓会だより

名古屋大学が発展していくためには、大学と同窓会の緊密な連携が必要とされており、大学と同窓会は連携して社会に一層の情報公開を行い、社会から種々のニーズをくみ上げる必要があります。全学同窓会は部局同窓会と連携しながら卒業生、学生、教職員の交流の場を提供し、名古屋大学全体の種々の活動に関する情報を発信しています。現在農学部からも3名の全学同窓会幹事（稲垣哲也、柴田秀樹、本道栄一）が参画しています。全学同窓会は2023年度、以下の活動を行いましたのでご報告いたします。

1) 同窓生名簿の整備

- 大学の運営する「卒業生等名簿管理システム」運営への協力
- 大学および各部局同窓会との連携強化
- 名簿の活用

2) 財政基盤整備

- 支援会員の募集、支援会費自動引落利用者の拡充
- 同窓会カードの普及、及びカード優待店舗の開拓
- 活動協力金の取り組み

3) 拠点形成

- 関東支部、遠州会、関西支部、岐阜支部との連携・支援
- 海外支部との連携・支援、新たな海外支部の設立検討
 - ・スリランカ支部設立の検討を継続する
 - ・海外支部への財政支援（支部費配分）
 - ・各支部（韓国、バングラデシュ、上海、タイ、北京、ベトナム、カンボジア、モンゴル、ウズベキスタン、台湾、ラオス、ミャンマー、インドネシア、フィリピン、マレーシア、米国）との連携強化

- 全学同窓会の本部の在り方の検討を継続する

4) 全学同窓会活動の運営基盤整備

- 評議員会の開催
- 部局同窓会との連携強化
 - ・名古屋大学同窓会サミットの開催
- 大学との連携強化
 - ・連絡会議の開催
- 委員会活動の機能強化
- 講演会・夕食会の実施
- クラブ活動同窓会、企業内同窓会等との連携

5) 学生支援

- 名大祭パンフレットへの広告掲載
- 寄附講義「キャリア形成論」の支援
- 学生活動支援
- 入学式、卒業式への全学同窓会からの来賓出席、祝辞
- 就職支援活動の検討

6) 大学支援

- 名古屋大学基金活動の支援
- ホームカミングデーの共催、支援
- 国際交流貢献顕彰レセプション（仮称）の共催、支援
- 大学支援事業の実施
- 国際交流活動の支援
- シンポジウム、フォーラムなどの後援
- アカデミックガウン購入の支援

7) 広報活動

- 大学と連携し、全会員に情報を発信
- 全学同窓会 Newsletter の発行
- 大学発行メルマガからの情報発信
- ホームページ、フェイスブックの活用
- 卒業生・修了生への全学同窓会活動の紹介

一般社団法人名古屋大学農学部・生命農学研究科同窓会会費規則

第1条（目的）

この規則は、この法人の定款第8条の規定に基づき、会員が支払う会費等に関する必要事項を定める。

第2条（会費）

会員は、定款第6条に定める種別に従って次の会費を納めなければならない。会費には会誌の購読料が含まれるものとする。

- （1） 正会員 永久会員会費2万円
ただし平成11年度以前に卒業の正会員は5年ごとに5000円
(平成11年度以前卒業の正会員も永久会員会費2万円を支払うこと
で永久会員とする)
- （2） 学生会員 永久会員会費2万円
ただしいったん永久会員となった場合、
卒業後そのまま正会員（永久会員）に移行する。
- （3） 特別会員・・・会費徴収なし
- （4） 名誉会員・・・会費徴収なし
- （5） 特例会員・・・会費徴収なし

第3条（規則の変更）

この規則は、社員総会の議決によって変更することができる。

附則

- 1 この規則は、2022年8月1日より実施する。

事務局だより

事務局では名古屋大学農学部・生命農学研究科同窓会会員録データの改訂を行っています。転居および転勤の際は、同窓会事務局（dosokai@agr.nagoya-u.ac.jp）までご連絡ください。今後も会員の皆様からのご質問・ご要望にお応えして参りたいと考えております。ご支援・ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

理化学器械・研究設備・光学機器・ガラス器具

主要取扱メーカー

アズワン	三洋電機
東京理化学	タイテック
旭硝子	日本エイドー
久保田商事	アトー
名古屋三立製作所	アドバンテック東洋

MZH
株式会社みずほ理化

〒468-0066 名古屋市天白区元八事一丁目33番地
TEL 052-831-8800
FAX 052-834-4117
E-mail: mizuhorika@k2.dion.ne.jp



印刷業から情報デザイン業へ

Info. + Design

長年培った表現技術を活かし、「印刷業」から「情報デザイン業」へと進化していきます。

販促支援サービス

マニュアルサービス

P&Dサービス

教育出版支援サービス

株式会社 **クイツス**

<http://www.kwix.co.jp>

■本社 〒448-0025 愛知県刈谷市幸町2-2
TEL 0566-24-5511 FAX 0566-26-0200

代表取締役社長 岡本 泰

同窓会したいなあ と思ったら

Reフレズイメージキャラクター
ともーる



同窓会幹事代行

★住所録不要。案内状発送・出欠管理はお任せください。

お問い合わせ 株式会社 サラト Reフレズ専用

TEL 0120-953-070

受付時間 月～金 9:30～12:00/13:00～17:00

株式会社 サラト

〒670-0948 兵庫県姫路市北条宮の町172

TEL 079-284-1380 FAX 079-284-0904



千年少年 Sennen Shonen

1000年先の地球と語り合う、少年のような視点と、純粋な心。

地球という大きな星が与えてくれた
シンプルでピュアな贈物、
それは記憶の中の少年の目と
心にくっきりと映っている。
一杯の水、大地の実り、雨の恵みや、木の木陰・・・
地球がくれるシンプルな贈物について、
私たちは真面目に考えたいと思う。
壮大なプロジェクトの中に、高度な技術の結晶の中に。
千年先の地球と共に。



株式会社三祐コンサルタンツ
Sanyu Consultants Inc.

農学部・生命農学研究科同窓会事務局では、広告の募集をしております。本会報の発行部数は、現在約10,000部で、本学農学部関係者に配布されています。会社の広告、同窓会の通知などにご利用下さい。

詳しくは、同窓会事務局まで。

個人情報の取り扱いについて

名古屋大学農学部・生命農学研究科同窓会では個人情報の正確で適切な管理に万全を期するため、会員データの管理を株式会社サラトへ委託しております。株式会社サラトは愛知県内約80校全国約1,500校の同窓会で会員データ管理を手がけ個人情報保護法に最も精通したプライバシーマーク取得企業です。なお、サラトは得られた個人情報を責任を持って厳重に管理し、個人情報を第三者に開示または提供しないことについて、名古屋大学農学部・生命農学研究科同窓会とサラトとの間で契約を取り交わしております。

天然と合成を融合して

地球に優しい

健康美と機能美を創造する

研究開発型

化学品メーカー



株式会社 岐阜セラツク製造所

TEL:058-272-0831 FAX:058-272-0704